

小学校生活に上手く適応できない子どもたちの出現をマスコミは「小一プロブレム」と名づけた。しかし、少なくともその子はその子なりの道筋で成長している。何らかの方法で、小学校入学当初における学校生活への適応をめざす必要がある。

そこで、園で体験してきた遊びの要素と小学校生活の中心をなす教科学習の要素を組み合わせる合科的・関連的な学習プログラム（スタートカリキュラム）の作成を考えたい。

1 スタートカリキュラムの編成の留意点

今後の児童の学校生活が円滑かつ適切に始められるかどうかの重要なスタートカリキュラムを編成する際、次の点に留意する必要がある。

幼稚園や保育園の成果を活用する。

幼稚園や保育園と連携・交流を実施し、年長期の保育内容や個の発達・成長を把握しておく。（園の小学校へのアプローチカリキュラムの作成）

スタートカリキュラムを学校全体の取組にする。

スタートカリキュラムは、義務教育を適切にスタートする大切なカリキュラムであり、他の組や学年の合同授業や交流授業も行う場合も想定されることから、意義について学校全体の取組として共有したい。誰でも1年生を担当したりかかわったりすることができる体制をつくりたい。

子どもの発達に応じた環境をつくる。

授業時間を15分や30分などと工夫したり、教室以外で授業したり、幼稚園や保育園での生活環境を取り入れる。また、他の学級や学年との交流授業を設定し、人間関係づくりにも配慮する。

学びや活動に必要な感・必然性のある単元にする。

学校において必要なこと（学校生活上の基礎基本）を子どもが重要であると考え、授業をつくりたい。まずは、子どもが自ら求め、見通しがもてる活動に出会わせたい。そこで教師が信頼と期待を寄せながら、子どもに多くの意思決定を委ねると、予想以上の学びを展開し、粘り強く問題とかかわっていくことは想定できる。

2 スタートカリキュラムの作成手順と具体

なぜ、1年生の年間週時数が35週ではなく、34週なのかを考えたい。これまでも、入学児童の学校への適応については、学校として非常に心を配り丁寧に対応してきており、ベテラン教員を1年生の担任にすることが多い。1～2週間で、学校の施設名やその使い方、学校のルールや安全指導など、学校生活の基本を指導していくのが通例である。

しかし、これまでのこのよう方法では経験豊かなベテラン教師の極意になり、そのノウハウは机の中にしまい込まれる恐れがある。それをスタートカリキュラム化すると、学校の貴重な財産として共有化されるとともに、本市の方針でもある小中一貫教育のスタートとして自覚化できる。さらに、より明確な意図を持った実践につながり、カリキュラム評価も必然として行われ、スタートカリキュラムの改善にもつながっていく。

スタートカリキュラムは、2～4週間で考えたい。

スタートカリキュラムとは：

幼児期の教育から小学校教育へと子どもの発達に応じたスムーズな移行ができるようにすることをめざしたカリキュラム編成の考え方であり、義務教育のスタートが適切に行われることを願った小学校入学以降のカリキュラムのことを意味する。

文部科学省教科調査官 田村 学



スタートカリキュラムの内容

子どもたちの求めや必要感を無視し、学校や教師が必要と思う訓練的な内容ばかりにならないこと。スタートカリキュラムの趣旨とは違う結果になる恐れがある。

まず、入学当初の子どもたちに身に付けさせたい力を話し合いたい。入学してくる子どもたちの実態から、「こんな力を付けさせたい」「こんなことができるようにしたい」など想定する。次は、こんな力やどんな習慣をいつまで身に付けさせるか整理したい。例えば、「3週間終了までに、45分間座っていることができるようにする。」「また、2週間終了までに、学習の準備をすることができる。」など、優先度を考えながら、時期を明確にしたい。さらに、指導内容と配列を決め、カリキュラムに落とし込む。週ごとのカリキュラムに、テーマを付けて計画的に実践にしたい。特に、身に付けさせたい力と教科、領域等の目標や内容とのかかわりを整理し、合科的・関連的な指導を検討してほしい。

小学校学習指導要領総則の解説
特に第1学年入学当初における生活科を中心とした合科的な指導については、新入生が、幼児教育から小学校教育へと円滑に移行することに資するものであり、幼児教育との連携の観点から工夫することが望まれる。

スタートカリキュラムの作成例

時間帯を考え、安心感をもたせる
・時間割に沿った日課はこれまで経験していない。生活科の学校探検をこの時間帯におおよそ決めて、生活リズムと学習パターンをもたせ安心感をもたせる。

自分のことは自分でする習慣を付ける
・登校してから、1校時までをすることをパターン化させ、自主性を身に付けさせたい。1週間は支援員がれば複数体制で、丁寧にできるまでかわり、2週間目からは自分でさせる。

毎週のテーマを設定して、意図的・計画的に環境に適応させる
・子どもたちは、入学後、教室配置や校庭、遊具などの物理的環境から先生や友だちなどの対人環境、そして学習内容や学校の規則などの社会的文化的な適応という段階を踏むと考えられる。
・学校生活に徐々に適応できるよう、例えば、はじめまして学校はじめまして友だち・先生 学校大好き たのしみになったばかりわたしなど、対象への気付きから自分自身への気付きとなるようにテーマを設定する。

テーマ ねらい	日(曜)	はじめまして 小学校 学校の施設や様子がわかる。楽しく安心して過ごせる。				友だちをつくって、いっぱいあそぼう 友だちとたくさん話することができる。楽しい遊びや生活ができる。					
校時	8日(金)	11日(月)	12日(火)	13日(水)	14日(木)	15日(金)	18日(月)	19日(火)	20日(水)	21日(木)	22日(金)
8:15 朝の会		着替え 学習準備 健康観察	着替え 学習準備 健康観察	着替え 学習準備 健康観察	着替え 学習準備 健康観察	着替え 学習準備 健康観察	朝の会指導 健康観察	朝の会指導 健康観察	朝の会指導 健康観察	朝の会指導 健康観察	朝の会指導 健康観察
8:35		歌・手遊び 音1	歌・手遊び 音1	読み聞かせ 国1	読み聞かせ 国1	歌・リズム 遊び 音1	読み聞かせ 国1	ゲーム 学活1	ダンス 体1	仲間づくり ゲーム 体1	ボールあ そび 体育2
9:20		トイレの使い 方 学活1									
9:30		学校たん けん 教室使用	学校たん けん 校内探検	学校たん けん 校庭探検 遊具使用 集団行動	学校たん けん 校庭探検 遊具使用 集団行動	学校たん けん 友だちづくり	学校たん けん 名刺づくり	学校たん けん 友だちと 遊ぼう 集団行動	学校たん けん 友だちと 遊ぼう 集団行動	学校たん けん ふりかえり	
10:15	入学式1										
10:35	学活1 今日から1 年生	下校指導 学活1	読み聞かせ 国語1			あんぜん 道徳1	名刺は何 まい? 算数1	友だちと 遊ぼう 集団行動	友だちと 遊ぼう 集団行動	ここで遊 んだよ 国語1	あそんだ よ 図工2
11:20											
11:30			給食指導 学活1	すうじ 算1	すうじ 算1	みつけたよ 図工1	とびっこ 遊び 体1	国語1	国語1	春のうた 音1	
12:15											

幼児期の教育からの連続性を意識する
・幼稚園や保育園で親しんだ歌や遊びを設定し、不安感を軽減させる。(事前に情報を収集)
・園の教師や保育士による授業も可能な限り導入する。

週のまとめとする金曜日
・当面、1週間のサイクルを意識させるために金曜日がその週のテーマのまとめになるように合科的に指導する。

小学校生活に慣れていない児童には、生活科を中心とした合科的な活動を創っていくのがよいと思う。入学直後は、生活科の単元「学校たんけん」2を基軸に子どもたちの思いや願いを求めとして考え、小学校生活に関心をもたせる活動を取り入れるとともに、活動が教室から校舎内、校庭へ徐々に広がっていくように学校探検を計画したい。

子どもの思いや願いを文脈・必要感とした主体的な生活科学習の創造
(幼児期の学びの芽生えと小学校の自覚的な学び)

- 合科的な指導:教科本来の目標を達成するために、二つ以上の教科の内容や方法を生かして、ある教科の学習目標を達成させる指導形態
合科学習:合科的、教科統合的単元を設定して、二教科以上の目標を同時に達成する学習形態(小学校学習指導要領生活の解説)
関連的な指導:教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導する形態。(小学校学習指導要領生活の解説)
- 入学直後の生活科学習
小学校学習指導要領生活の解説「例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる。こうした単元では、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めていくことが可能となる。」

参考文献 「スタートカリキュラムのすべて～仙台発・幼小連携の新たな視点～仙台市教育委員会 ぎょうせい」
「幼児期の教育と小学校教育をつなぐスタートカリキュラム」文部科学省教科調査官 田村 学
「スタートカリキュラムの質と現れる子どもの発達の実実」上智大学教授 奈須正裕